
少年の物語

時雨奏楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年の物語

【著者名】

時雨奏楽

N6088X

【あらすじ】

昔、ある大国があつた。

そこに使える少年はひそかにある人に思いを寄せていた。

しかし、それは叶わぬ恋。

そうと分かっていても少年は思いつづけた。

そして、思いを寄せて1年後。

少年の使える大国が戦争を起こしたのだ。

無論、王国に使える少年は戦争の地へ行かねばならない。

そこで少年はずっと隠し持っていた魔術を発動させた。

「イーストハープ・ヴォリック！…！」

少年はそう言い残し戦争の地へ向かった。

唱えた魔術は一体何を起こすのか。

それは私にもわからない。

プロローグ

静まつた夜の事。

一人の少年が道端に倒れていた。

血まみれで体全体が痙攣けいれんを起こしていた。

シン
と静まつた夜。

どこからか声が聞こえた。

「
我が名は 。お前を
が目覚める
。」
もひす

そのことばは誰に向かつて言つたのかはわからない。

もし、あの少年にその声が聞こえていても血まみれのあの状態じゃ
ともじやないが聞き取れないだろう。

数分後、倒れていた少年が残りの力を振り絞つているのかは分から
ないが、聞きとれるか取れないかくらいの小さな声で何やらぼそぼ
そと呟いた。

静まつた夜で、誰にも聞こえないように、自分に言い聞かせるよう
にそつと・・・・・・・・

少したつて、少年は呟き終わったのかまたぐつたりと地面に倒れた。

そして、そつと・・・・・

「 お、俺は・・・・まだ、し、死ねない・・・・・
。あいつをつ・・・・守るんだ・・・・ 終わる訳には・・・
・・・いかないんだ!・!・!」

そう言って、今度は呪文のような言葉を発し、少年は一瞬で灰と化した。

風に吹かれどこかへ飛んでいく。

月はそれを寂しそうに見つめていた。

プロローグ（後書き）

久々の投稿で少々ガタガタですがこれからも遅くなるとは思いますが書いていきますのでよろしくお願いします。

音と世界に招かれて

冷えた冬の朝。

道には凍りが張り詰め、空を映しだしていた。

物語はここから始まる。

そしてやがて終わる。

人間の一生と同じよひ。儂く、悲しく。

風に吹かれて消えて行つた少年は、今どこにいるのだらうか。

心地よい風に吹かれているとどこのからか音楽が流れてきた。

「あの店からか・・・。」

何処かで聞いたことのある音楽だつた。

その音楽が流れている店に入つてみると、そこには誰もいなかつた。

「なんだらう、この店。」

不思議に思いながら店を出ようとすると、音楽が急に違う曲に変わつた。

聞いたことのない音楽のはずなのに心は踊つた。

もしかしたら灰と化したあの少年が聞かせてくれているのか。

「まつたく・・・ビニンくるんだろうか。」

たぶん、少年の心の中の炎はまだ燃え尽きてはいないだろ？。

まつこの流れている音楽も誰かにあてて流しているのだろう。

バキツツ

氷を踏んでしまった。さっきまで映し出されていた空にひびが入った。

「バキツツ」

この音も自然な音で聞き慣れている。

そつ、この世界は音であふれている。

今宵、私はそこへ招かれる。

音と世界に招かれて（後書き）

“いやいやですね～次も遅くなるかもしません（――：）

運命の糸をつなぐ時

“ 未来つて何？”

私が聞いても、心は答えてくれない。

“ 運命^{さだめ}つて何？”

また、何も言わない。

心がつながる時は本当のかけがえのないものを手に入れた時。

灰と化したあの少年もまた、誰かと心でつながっていたのだろうか。

誰かを信じ、誰かを愛し、誰かを失い。

運命^{さだめ}には逆らえず、運命^{さだめ}のままに生かされる。

生きているとこ^ひりとは^み分、そつ^まつことなのだろ。

瀕死^{ひんし}の状態になると、運命^{さだめ}はその人を生かすかどうか決める。

奇跡^{わけ}が起きる理由^{わけ}は、運命^{さだめ}がチャンスを^与えるからだ。

人は運命^{さだめ}から吊るされた糸を手に入れられるかを争い日々生きている。

そう。その人次第なのだ。

あの時、少年がつぶやいた言葉は言靈となり、彼の運命糸を繋いだ
のだろうか。

私もいつか、自分の糸が切れる日が来るのだろう。

彼のよひにまた繫がれることは無いだろうが。

運命には逆らえない。

しかし、未来には逆らえる。

未来は変えられる。

そう。これからやり方によつて。

糸のつなぎ方によつて。

運命の糸をつなぐ時（後書き）
(あき書き)

凄く遅れました（…）

不思議な心は傳ぐて

心には「光」というものがある。

それは誰しもが持っている。

「希望」というものか。

しかし、その光に気付くのはごく一部の人間でしかない。

手に置いても気づかないものは多いのだ。

あの少年は心に何を宿し、生きていたのだろうか。

そして、私の心には何が宿っているのだろうか。

心は単純なことでも折れやすい。

心を揺さぶられ、狂わされれば人はまともにはいられない。

そう。だから儂いと言われるのだ。

心に刻み込まれた傷は一生癒えることは無い。

ずっと。

永遠^{エバ}に。

人間は、心がとても弱いことを知っている。

だから、人はそれを守りながら、隠しながら生きている。

ミステリアス・ザ・マインド
不思議な心は儚くて。

心の形は人によって違う。

だから、不思議なんだ。
ミステリー

あの少年は、きっと心が折れそうな中も耐え、誰かを守るために生き続けた。

心はいつでも不思議なもの。

その心に振り回される人間もいる。

少年には全てが儚いものであり、そして、全てが不思議だった。

私も見届けよう。

その儚い命を。

翔け、少年よ

人は皆、一度は空を飛びたいと思うだろう。

人間は、自分だけでは飛べないから、「ザ・フライカイブ飛行機」といつものを生み出した。

あの少年は、思っていたのだろうか。空を飛びたいと。

灰と化し、風に吹かれ、実現させたのだろうか。
もう一度生まれ変わつたら、少年は大切な人の事も忘れてしまうのだろう。

最後に大切な人と共に空を飛びたかったのだろうか。

私は鳥が羨ましい。

けれど、鳥の一生はとても短い。

人間よりも、地上の動物よりも。

少年の心ははばた翔けたのだろうか。

私もいつか、はばた大空をはばた翔いてみたい。

そして、今、少年に届くように叫ぶ。

「さあ！はばた翔け、少年よ！自らを解放し意のままにはばた翔け！」

少年の心に響いたかどうかはわからない。

近くの木に留まっていた鳥たちが大空を翔はばたき、遠くへ去つて行つた。

私は私。

少年は少年。

それぞれの思いによつてどう飛ぶかが決まる。

試験に合格し、将来が翔はばたけたり。

人それぞれなのだ。

翔はばたけた者は素直に生きる」とができる。

しかし、翔はばたけなかつたものはいつか後悔する。

少年はこれから生まれ変わつても、きっと素直に、そして明るく、前向きに生きることができるだらう。

そう。隠れて闇の中を生きているこの私とは違つてな。

血に染まれ、傳き恋よ

「 お、俺は・・・まだ、し、死ねない・・・
。あいつをつ・・・守るんだ・・・ 終わる訳には・・・
・・・いかないんだ!・!・! 」

少年の最後の言葉。

血まみれで、既に死んでいてもおかしくない身体で、誰かのために生きようとした少年。

いくつもの歳を重ね、大切な人と大切な時間を過ごしてきた。

少年の大切な人は今、戦争から逃れ、何処かに身を潜めているのだろうか。

私はそんなことばかり考えていた。

何故だらう。

私はあの少年について、別に、考えなくともよいのだ。

少年は恋をしていた。

しかし、その恋は“戦争”^{ロスト・ザ・ベル}と言つ言葉で、一瞬にして消え去つた。

儚く、終わってしまった。

少年の国は今や、どうなつてゐるのか。

戦争に勝ち、少年の大切な人も生きていることを私は願う。

生まれ変わつても、記憶が残ることは無いだろう。

いや、少年が戦争に行く前に唱えた呪文。

「イーストハープ・ヴォリック」

これは一体何を意味するのか。

もしかしたら、記憶を操作する呪文かもしれない。

それが本当なら、きっと、どこかで大切な人と会つ日が来るだろう。

そのときは、きっと新たな恋が始まるだろう。

さあ、私は次の街タウンへと旅立つか。

少年の事はもう少し様子を見よ。

次に会つときにはきっと、今まで以上に大変なことが待っているだ
るわ。

そう、私は思う。

自ら染まれ、傳わる恋よ（後書き）

物語があやふやになつたなつて思こます（――・）

黙つてはしき夢の中

人は必ず1日1回は寝る。

寝ないと次の日までの体力が持たないからだ。

精神的にもきつくなるだろう。

少年の国が戦争を起した頃。

戦争中はさきつと一睡もできなかつただろう。

たとえ、寝る時間があつたとしても、気が休まらない。

何故なら、寝てる間に殺されるかもしれないのだ。

そつ。戦争とはそついうものなのだ。

少年が血だけの理由は、さきつと戦争で殺されそうになつたから逃げてきたのだらう。

でも、大切な人を国へ残したまま自分だけ逃げてくるだらうか。

普通、大切な人を残して逃げるおろかな奴はない。
ロスト・ラード

もしかして、ここは別世界なのかもしれない。

そつ。夢の中とか。

ハルカ

そして、次の町に旅立とうとしている私も、少年の夢の中^{ラドウモ}にいるかもしれない。

いつの間に夢^{ラドウモ}の中へ来たのだろうか。

その時の記憶は・・・・・ない。

誰かに消されたのか。

そういうえば、少年と出会ひ以前の記憶は・・・・・。

消された・・・・・か。

多分私も愚か者^{ルーズキルト}だということだな。

眠りはいつしか夢^{ラドウモ}の中で。

少年は今は静かに生まれ変わるまで眠っているのだろうか。

大切な人の側に行けるよう。

願いながら。

我が名は“フール”ゝ不思議な人間と声ゝ（前書き）

2回に分けて更新します。

いつも書き方様々ですみません（ - - - ）

我が名は“フール”ゝ不思議な人間と声く

少年の心

「 我が名は 。 前を
が目覚める 。 もうす
ぐ 」

「俺の名は・・・・・。」

だめだ。どうしても思い出せない。

あの時、姫の事を忘れたくなくて禁術ヴァイオルツの呪文を唱えてしまった。

しかし、やはりまだ未完成だったか・・・。

姫をかばって負ったこの傷。

きつと、姫の心に刻まれてしまつた。

なんてことをしてしまつたんだろう・・・。

声が出せない・・。だから、いつも心で話しかけていた。けど、誰も気づいてはくれなかつた。

そんな時、姫は俺に話しかけてくれた唯一の人だつた。

僕が心で話せるのは姫だけだつた。

その姫とも距離があり過ぎて届かない。

お互いの心の痛みを一人で分かち合ってきたのに、肝心な時に分かれてしまえない。

とうあえず、死ぬわけにはいかなかつたから灰と化してみたけれど・・・。

「あのとき聞いた言葉・・・。一体誰だ？俺は姫以外とは話していない。いや、話さない。」

思い出してみると、やはり誰かに声をかけられた気がした。

それを覚えているところひとつもまたつながるかもしれない。

いつもなら忘れてしまつたんな記憶。

だが・・・

「俺は、今灰と化してしまつた・・・。繫ぐにもつなげないじゃないか。」

繫ぐためだけに元に戻つたらまたあの古傷が開いてしまう。

繫ぐにもつなげない。

身体に戻ろうにも戻れない。

誰かに伝えようとしても伝わらない。

「駄目じゃないか…………。」

「どうやら俺は、生き延びる為だけに、殆どの選択肢を失ってしまったようだ。」

「どうすればいいのだろうか…………。」

「とりあえず、風に吹かれて知らない土地にやつてきた。」

「それで俺はあることに気が付いた。」

灰と化しているはずの俺に、手を振っている人間がいたのだ。

「ん…………？あの人间、俺の事が見えてる？？」

思わず、手を振り返してしまった。

「とりあえず、話しかけてみるか…………。」

（あの…………もしかして俺の事見えますか？）

灰と化したため、今ではそこら辺に転がっている「//」と同じくらいの力スになっている俺が、今更こんなことを聞くのも何か恥ずかしい。

だが、そんなことを想っている暇なんて無かった。

「…………Hey you!—What you name?？」

「……………。」

俺は灰になつていていたとしても硬直してしまった。

知らない言葉を話されては対処のしようもない。

俺は諦めてまた風に吹かれた。

「…………ちよ、ちよつと待つて……灰の君。」

俺はまた硬直した。やはり見えていたのだ。

(見えてるなら見えてるって言つてくれればいいのだが…………。)

「（めん）めん（めん）。君、もしかして…………？」

強い風が吹いて良くなづかれた。

（（めん。良く聞こえなかつた。もう一回言つてくれる？）

「えつと、君つてウォースレイト王国の兵士だった？」

「…………。」

率直に聞かれた。しかし、俺はすぐには答えなかつた。

何故なら、相手が何者なのかもわからないのに姫のいる王国の事を話す訳にはいかないからだ。

(お前、誰だ？？何故、俺の心に声が届く？)

「あ、」めぐ。俺の名前は鎮桜城。ウォースレイト王国の1軍兵士だ。

(王国の・・・1軍兵士ー?)

城はエリートの称号である紋章を見せた。

「どうだ。これで信じたか? 2軍兵士。1386番、ロウイー・アーヴィングタ君。」

まだ、戦争が起る前。ウォースレイト王国で呼ばれていた番号。だが、自分の名前だけはどうしても、思い出せなかつた。

(す、すみません。一つのくせに、無礼なことを・・・。どうかお許しくださいー)

素直に謝つた。しかし、期待はずれの答えが返つてきた。

「そんなことよりー386番。今のお前の状況を説明しろ。」

謝罪をすんなりスルされた。だが、すぐに今の状況を説明しなければならなかつたので気にしないことにした。

「・・・・。やうやうとか。しかし、戦争を放棄してのうのうと逃げるとは。お前は大変なことをしたんだぞ! 今すぐ王国に戻れ! ・・・・と、言いたいと頃なのだが。灰と化した状態じゃ戻りにも戻れないな。」

だからと言って、今戻る訳にはいかない。戻つたらあの傷が開いてしまうからだ。

その傷を見られる訳にはいかない。

でも、姫にも会いたい。

それに、自分の名前すらろくに思い出せないなんてへっぽこすぎる。

そんなとき。城の後ろから俺に手招きしている人間がいた。

俺は、こつそりその人間の方へ行つた。

何故かそっちに行かなればならないと心が思つたからだ。

それに、手招きしていた人間には何となくだが見覚えがあつた。

我が名は“フール”～魔術者と王国～

その人間の方に寄つてみると、突然空間にゆがみが生じた。

(な、これは!?)

そう、これはウォースレイト王国で、よくつかわれている魔術。

「魔術についてはまだ覚えているみたいだね。でも、自分の名前だけはどうしても思い出せないようだ。」

俺の事を何か知つてゐるようだった。

「君の心には鍵がかかっているようだ。その鍵さえとければ君の体も名前も声も古傷も元に戻ると思つよ。」

その言葉を聞いた瞬間、俺は相手の肩をつかんでいた。

(どうすれば元に戻れる? 何でもするから、頼む! 教えてくれ!)
の通りだ!)

俺は灰と化していることを忘れ、必死に土下座した。

「良かるべ。我が名は“フール”。お前を救いに来た。もつすべ神々が目覚める。」

聞いたことのある言葉だった。

そう。灰と化する直前に聞こえたあの言葉。

（まさか、あんたが俺の心に声を……。）

「君の名前は“ロウイート・アミコレッタ”だからな。そうだな……。“ロート”。長いから短くした。良いな、ロート。」

（あ、はい。（適當だな……。））

かなりの魔力が感じられた。まだ、感覚は鈍つていないようだ。

そして、俺はフールから王国の事や、姫の事について聞いた。

どうやら、フールが言つには姫は何とか無事なようだ。だが、いつもぼーっとして以前の明るさが無くなつたと言つていた。

（（俺のせいいか……。））

「ま、ロストファイナル王国秘密機関探索科本部長のこの俺にかかるくらいは朝飯前だがな。」

（な、あのロスファイ本部長！？）

その機關については耳にしたことはあった。

その凄い人を目の前として俺は硬直してしまった。

「そんなに固まらなくても良いんだけど。で、ロートの心の鍵を解くにはもうすぐ目覚める神々に対して祈りを捧げなければならない。たとえ、どんな犠牲が出ようとも。そして、神を絶対に裏切らないこと。それを守れるのならきっと、ロートの心の鍵はとかれるであ

る。」

（分かりました。一生涯その神々に祈りを捧げます。そして、何があつても絶対に裏切りません。）

俺は姫のもとに戻れるならどんな試練でも耐えることを誓った。

「じゃ、その神々がいるところ（凱旋山^{ヘルディオール}）に行こうか。」

「うして、俺とフルは凱旋山に行くことになった。

我が名は“フール”～魔術者と王国～（後書き）

やつぱり物語があやふやになってしまった感じです（――・）

この物語の終わりが見えない・・・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6088x/>

少年の物語

2011年11月20日13時36分発行